

I. 21世紀を生きる子どもたち

—個が生きる授業を求めて—

副校長 神田和正

1. 自ら学ぶ力（自己教育力）の基礎を育成する教育活動を

(1) これからの教育が目指すもの

今回発表された新学習指導要領の基底には、21世紀を見通した教育の目標にかかわる多くの提言が生かされている。先ず、中央教育審議会の「審議の経過報告」（昭. 58. 11. 15.）から始まる。本来であれば、これに基づいて指導要領の改訂が行われるのであるが、今回は、改訂の途中から臨時教育審議会が結成され、広い立場から教育改革も目指した審議が行われた。この審議会では4次にわたる答申を行った。この答申が今回の新学習指導要領の改訂に大きく響いている。

現在、学校に学ぶ児童が活躍するであろう21世紀を見通した学校の教育目標を考える上で、審議会での報告や答申は見逃すことはできない。教育課程審議会の「中間のまとめ」も含めて次にのせ、本校の教育目標を見直す根拠としたい。

中央教育審議会・教育内容等小委員会「審議経過報告」「今後特に重視されなければならない視点」

1. 自己教育力の育成
2. 基礎・基本の徹底
3. 個性と創造性の伸長
4. 文化と伝統の尊重

臨時教育審議会 第1次答申「改革の基本的考え方」（昭. 60. 6. 26.）

1. 個性尊重の原則
2. 基礎・基本の重視
3. 創造性・考え方・表現力の重視
4. 選択の機会の拡大
5. 教育環境の人間化
6. 生涯学習体系への移行
7. 国際化への対応
8. 情報化への対応

臨時教育審議会 第2次答申「21世紀のための教育目標」（昭. 61. 4. 23.）

1. ひろい心・すこやかな体・豊かな創造力
2. 自由・自立と公共の精神
3. 世界の中の日本人

臨時教育審議会 第4次答申「教育改革の視点」（昭. 62. 8. 7.）

1. 個性尊重の原則
2. 生涯学習体系への移行
3. 変化への対応 ① 国際社会への貢献 ② 情報化社会への対応（第3次答申は省略）

教育課程審議会 「中間のまとめ」（昭. 62. 10. 20.） 「1. 教育課程改善のねらい」

1. 豊かな心をもち、たくましく生きる人間の育成を図ること
2. 自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力の育成を重視すること
3. 国民として必要とされる基礎的・基本的な内容を重視し、個性を生かす教育の充実を図ること
4. 国際理解を深め、我が国の文化と伝統を尊重する態度の育成を重視すること

ここに取り上げたものすべて重要な事項であり、どれ一つ捨てるものはないが、その中でも21世紀を目指した事項についてあえて抽出してみる（アンダーラインの事項）と、今後の教育の在り方が、はっきりと浮かび上がってくる。とくに「自己教育力」から始まる個性重視（個が生きる）の

系統（ゴシック体で示す）には、今後注目する必要がある。

これまでも個（一人ひとり）に注目しなかったわけではなかったが、とかく一斉画一的になりがちで、ほんとうに個（一人ひとり）が生きていたことは言えなかった。これまでの本校における教育目標を初め、様々な教育活動のすべてに「個（一人ひとり）が活着ているか」という新たな光を当て見直す必要がある。

（2）本校の教育目標の見直し

教育目標のそれ自体は、本来児童一人ひとりの上に具現することをねらっているものである。十把ひとからげにして「殆ど達成している」「おおよそ達成している」「あまり達成していない」というように考えるものではない。一人ひとりに当たって確認すべきものであろう。本校の教育目標は、次のようになっている。

国際社会の中で信頼と尊敬を得る日本人を育成することを根底として、たくましい体力、強靱な意志力、創造的思考力の育成を根幹とし、道徳的心情という緑したたる葉と美的情操という輝かしい花とをつけた実践力ある人間性豊かな子どもを育てる。

この長い文の中のアンダーラインをつけた「日本人」「子ども」という言い方が、非常に抽象的・一般的で、児童の一人ひとりがイメージ化できない感じである。しかし、個（一人ひとり）に照らして、目標達成を確認すべきであろう。この内容については、比喩的表現が気になるが、含まれている内容は21世紀に生きる児童の目標としてふさわしく、現在のところ修正する必要はないであろう。

児童一人ひとりに目標が具現されているかどうかを具体的に確認するために、児童の立場からの目標を三つ考えている。次のものである。

「おはよう」とあいさつする子（明るい子）

「よしやるぞ」とがんばる子（強い子）

「こうすれば」とくふうする子（かしこい子）

これらは、本校の教育目標のすべてを含むものとして考えたが、児童の学校生活の中で最も代表的な場面を想定し、そこにおける児童の理解の姿を描いたものである。これらを児童の努力で実現することによって、学校生活・家庭生活・社会生活の中に求められる様々な目標と結びついて、学校の教育目標へと向上させようと考えている。したがって、学校における様々な学習活動場面で考えられている沢山の目標についても、以上のような視点からの見直しが必要である。これらは、来年度実施を予定して編成した教育課程に具現されている。

2. 個が生きる教育課程の創造

（1）新小学校学習指導要領に見る教育課程の改善点

来年度からの実施を目指して、本校の教育課程の編成を終えた。来年度より実施しながら今回発表された新小学校学習指導要領の総則に見られる改善点も踏まえて、日々の実践・研究を進めていかななくてはならない。現行のものに触れられていない改善点を抽出すると以下のようなものがある。

学校の教育活動を進めるに当たっては、自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力の育成を図るとともに、基礎的・基本的な内容の指導を徹底し、個性を生かす教育の充実に努めなければならない。（第1 教育課程編成の一般方針 1 アンダーライン引用者 以下同じ）

道徳教育を進めるに当たっては、教師と児童及び児童相互の人間関係を深めるとともに、豊かな体験を通して児童の内面に根ざした道徳性の育成が図られるよう配慮しなければならない。ま

た、家庭や地域社会との連携を図り、日常生活における基本的生活習慣や望ましい人間関係の育成などにかかわる道徳的実践が促されるよう配慮しなければならない。(一般方針 2)

学校における体育に関する指導は、学校教育活動全体を通じて適切に行うものとする。特に、体力の向上及び健康の保持増進に関する指導については、体育科の時間はもとより、特別活動などにおいても十分行うよう努めることとして、それらの指導を通して、日常生活における適切な体育活動の実践が促されるとともに、生涯を通じて健康で安全な生活を送るための基礎が培われるよう配慮しなければならない。(一般方針 3)

各教科等のそれぞれの授業の1単位時間は、45分を常例とし、学校や児童の実態に即して適切に定めるものとする。なお、各教科等の特質に応じ、指導方法の工夫によって教育効果を高めることができる場合には、各教科等の年間授業時数を確保しつつ、適切な計画の下に授業の1単位時間を弾力的に運用することができる。(第3 授業時数等の取扱い 3)

(1) 学年目標を2学年まとめて示した教科については、当該学年間を見通して地域や学校及び児童の実態に応じた効果的な指導ができるようにすること。(第4 指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項 1)

(2) 各教科等の指導に当たっては、体験的な活動を重視するとともに、児童の興味や関心を生かし、自主的、自発的な学習が促されるよう工夫すること。(配慮すべき事項 2)

(3) 教師と児童及び児童相互の好ましい人間関係を育てるとともに、児童理解を深め、生徒指導の充実を図ること。(配慮すべき事項 2)

(4) 各教科等の指導に当たっては、学習内容を実現に身に付けることができるよう、児童の実態に応じ、個に応じた指導など指導方法の工夫改善に努めること。(配慮すべき事項 2)

(5) 学校の実態等に応じ、教師の特性を生かしたり、教師の協力的な指導を行ったりするなどの指導体制の工夫改善に努めること。(配慮すべき事項 2)

(7) 海外から帰国した児童などについては、学校生活への適応を図るとともに、外国における生活経験を生かすなど適切な指導を行うこと。(配慮すべき事項 2)

(10) 地域や学校の実態等に応じ、家庭や地域社会との連携を深めるとともに、学校相互の連携や交流を図ることに努めること。(配慮すべき事項 2)

以上、項目的にもう一度整理すると、以下ようになる。これは、改善の要点として示されたものでもある。作成した教育課程を改善する際のポイントとして心にとめておくために簡略化して示した。

- 自己教育力の育成や個性を生かす教育の推進
- 道徳教育の充実
- 体育に関する指導の充実
- 授業の一単位時間の運用の弾力化
- 学年目標を2学年にまとめて示した教科の内容の取扱い
- 指導方法や指導体制の工夫
- 教育機器の活用や帰国子女への配慮
- 「開かれた学校」の推進

(2) 教育課程の改善努力

教育課程を編成し、それを印刷し製本して手元に置いたが、全く利用しない改善もしないということではあってはならない。平素の教育実践・研究を通して、常に改善していこうとする心構えと努力とが必要である。その際に、前項で取り上げた改善の視点によることも大事であるが、何よりも大事な改善の視点は、自分の担当する児童一人ひとりの指導結果を踏まえた以下のようなものであ

る。

- 指導目標は、児童一人ひとりにふさわしいものであったか。
- 学習活動（単元や題材）は、児童一人ひとりを生き生きと活動させるものであったか。
- 準備した教材・教具・資料は、児童一人ひとりの学習活動の中で生かされていたか。
- 指導過程・指導方法は、児童一人ひとりを生かすものであったか。
- 学習時間は、児童一人ひとりの学習活動を十分に行わせるものであったか。

以上の表現の中で、児童一人ひとりにこだわり過ぎた感じはあるが、抽象的・一般的な表現になってしまう教育課程の表現の中に、常に児童一人ひとりの学習状態を思い浮べてほしいという願いがある。さらに、児童一人ひとりを生かす表現が、少しでも教育課程の中に書き込まれることを願っている。

3. 個が生きる教育実践・研究の積み上げ

(1) 協同研究を重視する

ここ4年間にわたって、教育研究の中心に各教科の授業研究を置いた。学校教育の領域・内容は、実に幅広く多様であり、そのどこも力を抜くことはできない。しかし、研究に際しては、どこかに重点を置かなければ深まらない。どこに置いても結果的には、すべてにかかわって充実するわけであるが、毎日の大部分の時間を取って行われている授業に重点を置くことにした。附属学校に期待されるものにも教科の授業の在り方についてが多いのではなかろうか。

授業に重点を置きながら、毎日の実践・研究を進めていると、その授業の中に他教科や他領域、学校生活・家庭生活・社会生活などの影響を受けたものが必ず顔を出してくる。全教師による協同研究を進めることによって視野も広がり、全教育活動を見通した授業の充実も可能である。

これまでの全教師による授業研究を通して、本年度は、児童の個（一人ひとり）に目を向けた「個が生きる授業」を志向してきた。僅か半年余りの研究期間ではあったが、そこで得たものは、実に重くさらに多様であった。その中から「個が生きる学習過程」と「目標と評価の関連」の二つを取り上げて述べておきたい。

(2) 個が生きる学習過程

これまでの授業研究のそれぞれの段階において、そこに学ぶ児童（一人ひとり）にこだわって授業を見たり考えたりしてきた。このことについては、本校で発行している『初等教育』にこれまで何度か発表してきた。本年度の研究計画を一応終える時点で「個が生きる学習（授業）の過程」を整理し、次年度への手掛りになるようなものを考えてみた。次ページに示す図式（図1）がそれである。

この図式は、授業の事前研究において、各教科より提案されたもの、授業中の観察、さらに、事後研究に提示された各種の授業結果などから、授業に必要な条件とか要因（要素）などを拾い出して、わたしなりに体系づけたものである。拾い出せば数限りなく出てくるが、必要最小限のものだけを提示した。

このように図示してみても、とくに大事だと思うのは、「自己向上の要因」の筋道を明らかにするという点である。その中でも「自己評価」の在り方、「自己表現（自己承認・自己賞賛）」の在り方の二つについては、授業中の「どこで」「どう」位置づけするか、「どのような」学習活動にするかなどについて考えておく必要がある。

(3) 目標と評価の関連を密接にする

目標と評価の関連を密接にするということは、至極当然のようであるが、授業の中では遊離している場合が多い。目標は目標として、評価は評価として独立して扱われていて、つながりなく独り

歩きしているように見える。目標を達成するために授業があるとすれば、その達成を確認する評価は、目標と密接に結びついて実施されなければ生きてこない。そこで、目標と評価の関連を以下に示すように図式（図2）化してみた。

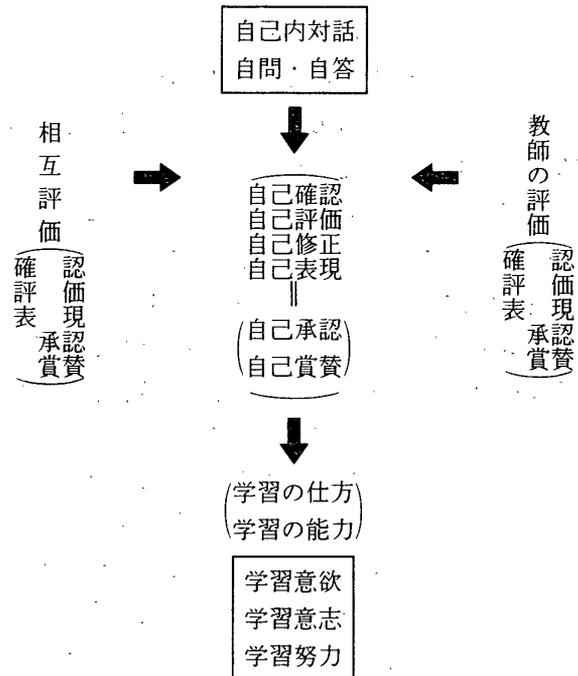
〔図1〕 個が生きる学習過程

学習活動（個と集団のかかわり）

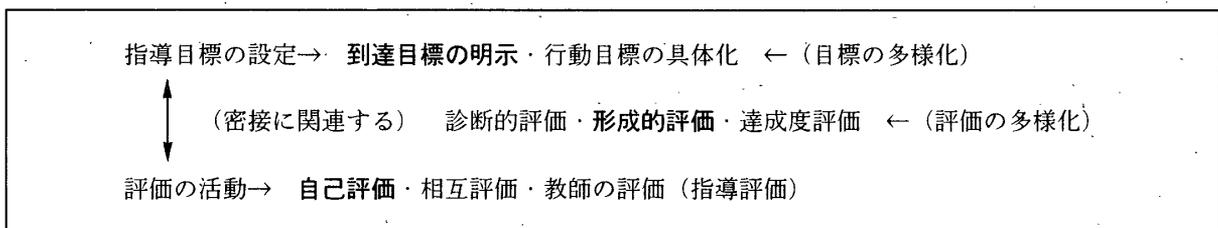
1. 本時の課題（目標・めあて）を確かめよう。
2. 自分の力で解決（学習）しよう。
3. 自分の結果（学習）を確認（まとめ）しよう。
4. それぞれの確認（まとめ）を発表しよう。
5. 自分の確認（まとめ）を他の人と比べよう。
6. お互いにかかわり合って高まり深まろう。
7. みんなの結果（学習）を確認（まとめ）よう。
8. 自分の結果（学習）を修正、補充しよう。
9. 次の課題（目標・めあて）を見つけよう

自己向上の要因（個の学習要因）

（学習への興味・関心）
課題の確認・追究



〔図2〕 目標と評価の関連



「個が生きるための目標と評価」の中核となるのは、「到達目標の明示→形成的評価→自己評価」という筋道であろう。授業における目標の示し方（確認の仕方）は、できる限りそれぞれの個（一人ひとり）に即したものがよい。全員が一定の水準にまで到達することを評価することも大事だが、むしろ個（一人ひとり）に応じた形成的評価を大切にする。さらに、最終的には、自己教育力（学習力）にまで結びつくよう、自己評価の能力を身につけさせたい。自己の能力を過信することなく、自己の能力を卑下することなく、自己の能力を高めていく可能性を見極めて努力し続け、21世紀を生きて活躍する人間になってほしい。